

令和 7 年度 春期

午前 I 共通問題(SC, NW, ST, SA, SM)試験分析と講評

■午前 I 試験(高度試験共通)講評

共通知識として幅広い出題範囲の全分野から 30 問が出題される試験です。今回の分野別出題数はテクノロジー分野が 17 問、マネジメント分野が 5 問、ストラテジ分野が 8 問でこれまでと同じでした。出題された問題は、従来どおり全て同時期に実施された応用情報技術者試験（以下、AP 試験）の午前問題 80 問から選択されています。重点分野のセキュリティからの出題が 4 問と最も多く、今回、ユーザーインタフェースと技術戦略マネジメント分野からの出題はありませんでした。

新しい内容の新傾向といえる問題は次の 8 問（前回 3 問）で、かなり増えています。選択元の AP 試験で増えていることによるものといえます。

- 問 2 機械学習の過程で過学習と疑われたときの解消方法
- 問 5 稼働率、MTBF、MTTR で成り立つ関係式
- 問 7 間欠動作の平均電流を 1μA 以下にするための待機時間
- 問 10 同じ値のコードをもつ表の行を自動的に削除する SQL 文
- 問 12 CRYPTREC 暗号リストの説明（ST 既出問題、AP では初）
- 問 23 DX 認定制度における認定基準に含まれている事項
- 問 27 エッジ AI においてエッジデバイスで行われる推論処理
- 問 30 生成 AI を利用した画像生成と利用の著作権侵害について

これまで繰り返し出題されている定番といえる問題は 14 問程度で、前回の 16 問から少し減っています。なお、やや難しいと考えた問題は 6 問（問 5, 7, 12, 18, 24, 25）で、前回の 2 問から増えています。

問題の出題形式は、文章の正誤問題が 14 問（前回 18 問）、用語問題が 5 問（前回 5 問）、計算問題が 4 問（前回 4 問）、考察問題が 7 問（前回 3 問）で、考察問題が増え、文章問題が減っています。これらのことから、全体として少し難しいと感じた受験者が多かったと思われます。

（今回の分野別出題内容）☐は新傾向問題、☐は既出の定番問題

- ・テクノロジー分野……近似値、機械学習の過学習、スタック、CPU 処理時間、稼働率の関係、LRU 方式、待機時間、SVG 画像、正規形の変換、SQL (CASCADE)、PoE、CRYPTREC 暗号リスト、SBOM、OS コマンドインジェクション、プロトコルの関係、デザインレビュー、スプリントレビュー

- ・マネジメント分野……EVM によるプロジェクト評価、クラッシング、サービス停止時間、監査のウォークスルー法、監査手続
- ・ストラテジ分野……DX 認定制度、クラウドを実現するプロビジョニング、契約形態、PPM、エッジ AI の推論処理、AI を用いたマシンビジョン、変動費の計算、生成 AI 利用の著作権侵害

分野別の出題数は次のような結果で、従来と同じでした。

分野	大分類	分野別	R6年春	R6年秋	R7年春
テクノロジー系	基礎理論	17	3	3	3
	コンピュータシステム		4	5	4
	技術要素		8	8	8
	開発技術		2	1	2
マネジメント系	プロジェクトマネジメント	5	2	2	2
	サービスマネジメント		3	3	3
ストラテジ系	システム戦略	8	3	3	3
	経営戦略		3	3	3
	企業と法務		2	2	2
合計		30	30	30	30

これまで、出題される問題の約 7 割は、過去の基本情報技術者試験や AP 試験で出題された基本的な内容でしたが、今回は 5 割程度に減りました。高度試験で専門分野の力を発揮するのは午前 II の専門知識の試験からになりますが、午前 I 試験から受験する人は、過去の応用情報技術者試験の午前問題を解き、余裕をもって 7 割以上正解できるように、理解度を上げてください。

IPA の試験統計情報を分析すると、高度試験を午前 I から受けた人のうち、60 点以上取れた人は 5 割から 6 割台で推移していて、半数近くの人が次の午前 II 以降の採点に進んでいない状況です。高度共通の午前 I 試験では難しい内容も出題されますが、苦手な分野の学習は基本的な問題が多い基本情報技術者試験の内容から始め、基礎知識を確実に理解するようにしてください。

また、出題範囲が広いため、全体をまんべんなく学習するのにかなり時間がかかります。そのため、試験対策としては、これまで出題された出題内容のポイント事項を重点的に解説したアイテック刊行の「高度午前 I ・応用情報 午前試験対策書」で効率よく学習することをお勧めします。

以上

令和 7 年度春期

システムアーキテクト試験分析と講評

■試験全体講評

システムアーキテクト試験（以下、SA 試験という）の全体講評としては、昨年と同様に今年の試験全体の難易度は“標準的よりもやや高い”と判断します。根拠としては、午前Ⅱ多肢選択式問題試験（以下、午前Ⅱ試験という）の難易度は“標準的”，午後Ⅰ記述式問題試験（以下、午後Ⅰ試験という）の難易度は，“標準的よりもやや高い”，午後Ⅱ論述式問題試験（以下、午後Ⅱ試験という）の難易度は“標準的よりもやや高い”という結果で、試験全体では“標準的よりもやや高い”試験が多かったからです。難易度について特記すべき点として、午後Ⅱ試験において、論述する事例が限定されて論述し難く、難易度が標準的よりも高い内容で出題されていることが挙げられます。ただし、午後Ⅱ試験の問題が、論述する事例に限られる論述しにくい問題と、論述しやすい問題で構成されている点は、例年どおりです。

なお、難易度については過去 2 回の試験の平均を標準的とし、“低い”，“やや低い”，“標準的”，“やや高い”，“高い”の 5 段階で評価しています。各試験の難易度を「標準的」や「標準的よりもやや高い」とした根拠は、各試験の詳細で説明します。

過去からの傾向も合わせた、今年の応募者数や過去の合格率は次のとおりです。

年度	応募者数	受験者数 (受験率)	合格者数 (合格率)
令和 5 年度	5,684	3,679(64.7%)	581(15.8%)
令和 6 年度	5,696	3,666(64.4%)	549(15.0%)
令和 7 年度	6,021	3,963(65.8%)	616(15.5%)

応募者数については、昨年のプラス 0.2%の微増から今年はプラス 5.7%増となりました。まず、SA 試験の受験の前に合格を目指す人が多い応用情報技術者試験について分析すると、昨年の応用情報技術者試験の応募者の増加率は 12.3%と一昨年の 2 倍ほどになっていました。このときの合格者が今年の SA 試験を受験することで受験者増につながったと推測できます。

合格率については、令和 7 年度の試験全体の難易度が“標準的よりもやや高

い”ですが、令和 7 年度の合格率は、15.5%でした。

■午前Ⅱ試験講評

新傾向問題数は前年と同じ 5 問、SA 試験の過去問題の出題数が 1 問減り 10 問という状況を根拠に、午前Ⅱ試験の難易度については、“標準的”と判断します。

特記すべき点は、SA 試験の過去問題からの出題が 40%あり、そのうち 70%が何らかの改訂がされているという点です。したがって、解答問題を解いて答え合わせするだけでは試験対策としては不十分であり、学習テキストにある解答解説をしっかりと学習する必要があります。

新傾向問題と SA 試験の過去問題の問題番号とタイトルを次に挙げます。

〔新傾向問題〕

- 問 3 全ての Web サイトで利用できる OSS の仕組み
- 問 7 テストセットに不具合検出する能力があるかを評価するテスト
- 問 8 プログラムのサイクロマティック複雑度
- 問 17 事象の年間発生確率が最も低くなる情報漏えい対策
- 問 21 コンテナ型仮想化におけるオーケストレーションの説明

〔SA 試験における過去問題〕

- 問 1 DFD の図形要素
- 問 2 オブジェクト指向設計における設計原則の開放・閉鎖原則
- 問 4 大量データの並列処理の 2 段階実行のプログラミングモデル
- 問 9 サブルーチンへの引数の受渡し方
- 問 10 教育効果測定カークパトリックモデルの 4 段階評価
- 問 11 ユースケース駆動開発の利点
- 問 13 要件定義で使用される図
- 問 14 ラボ契約の特徴
- 問 19 サブミッションポートを導入する目的
- 問 25 スイッチングハブと同等の機能をもち同じ階層で動作する装置

新傾向問題については、システムアーキテクトとして、今後、専門知識を習得する際の参考にするとよいでしょう。SA 試験における過去問題については、過去問題中心の演習の成果を測定する際に活用してもよいでしょう。

午前Ⅱ問題を分類し、過去 3 年間の実績を次に示します。今回から“ユーザーインタフェース”が追加されて 1 問出題されました。ただし、各分野に対する出題数の分布については大きな変化はありませんでした。

大分類	中分類	出題数		
		令和 5 年春期	令和 6 年春期	令和 7 年春期
コンピュータシステム	コンピュータ構成要素	1	1	1
	システム構成要素	2	2	2
技術要素	ユーザーインタフェース	—	—	1
	データベース	1	1	1
	ネットワーク	1	1	1
	セキュリティ	4	5	4
開発技術	システム開発技術	9	9	10
	ソフトウェア開発管理技術	3	3	1
システム戦略	システム戦略	1	0	1
	システム企画	3	3	3

注記) ユーザーインタフェースは令和 7 年春期から追加

■午後 I 試験講評

午後 I 試験の難易度は、“標準的よりもやや高い”と判断します。根拠は、問 2 と問 3 の難易度が“標準的”であるにもかかわらず、受験者が選択する率が高いと推測できる問 1 において、新傾向問題が出題され、難易度も“標準的よりもやや高い”からです。ただし、3 問全体を通して、各設問の難易度について“標準的よりも高い”はなく、例年どおり 5 から 6 ページで問題が構成されています。

問 1 は自治体における消耗品の集中購買化とそれに伴う業務システムの新規構築を題材にした問題です。問 2 は医療機関向けに医療機器の販売と導入支援サービスを提供する会社における営業活動を支援する営業支援システムの新規開発を題材にした問題です。問 3 は不動産会社における不動産売買仲介システムの再構築を題材にした問題です。

記述式問題全般で特記すべき点は、記述式問題から図がなくなり、ページ数に変化がないことで、図の分の文字数が増え、制限時間内での文章読解力が問われている点です。

新傾向問題は問 1 です。根拠は、“民間向けの購買 SaaS や購買ソフトウェアパッケージを自治体が利用する際の工夫”という目新しい内容を題材にして作問されているからです。

次に、各問題の講評を述べます。

問 1 消耗品の集中購買化とそれに伴う業務システムの新規構築

自治体における消耗品の集中購買化とそれに伴う業務システムの新規構築を題材にした問題です。問題の後半では、民間企業向けの購買関連の SaaS、ソフトウェアパッケージなど（以下、購買 PKG という）の導入を検討しています。この問題の読解において特記すべき点は、民間企業向けの購買 PKG を当該自治体を利用する際に、特徴的な使い方をするという点です。消耗品の売り手のための機能を買手に使わせるという使い方です。具体的には、購買 PKG において消耗品のサプライヤー向けの機能を購買部門に該当する総務課に利用させるという点です。この問題では、この使い方をすると分かると高得点が期待できると考えます。以上を踏まえて、この問題を新傾向問題とし、問 1 の難易度を“標準よりもやや高い”と判断します。

解法テクニックにおいて特記すべき点は、「ただし」という接続詞に着目して問題を読み込むという点です。具体的には、「ただし」の後に、この問題を読解するために必要な、サプライヤー向けの機能をサプライヤーではなく購買を担当する総務課に利用させる旨が書いてあります。

問 2 営業活動を支援するシステム

医療機関向けに医療機器の販売と導入支援サービスを提供する会社における営業活動を支援する営業支援システムの新規開発を題材にした問題です。この問題の読解において特記すべき点は、“RPA”や“ローコード開発”を絡めた新規システム開発を題材にしている点です。推測ですが、今後、RPA やローコード開発を絡めた問題が出題されることを示唆している可能性があります。

解法テクニックにおいて特記すべき点は、「～が、～」という表現の文章が解答に絡むという点です。具体的には「商談ツール作成以来約 10 年分の商談情報を蓄積しているが」という記述は設問 4(1)と関係します。「利用者の情報は人事システムから取得しているが、所属組織と役職は取得せず」という記述は、設問 3(2)と関係します。

特に難易度が標準的より高い設問がなく、問題のページ数が 6 ページと標準的であることを根拠に問 2 の難易度を「標準的」と判断します

問 3 不動産売買仲介システムの再構築

不動産会社における不動産売買仲介システムの再構築を題材にした問題です。この問題の読解において特記すべき点は、AI による文章作成及び校正支援サービスの適用先の業務の選定では情報セキュリティを考慮する必要があるという点です。具体的には設問 2 が該当します。AI による文章作成及び校

正支援サービスの利用では、情報漏えいに留意する必要があります。大雑把ですが、“社外に公表しても問題のない情報は販売促進にかかわる情報くらい”と考えるとよいかもしれません。

解法テクニックにおいて特記すべき点は、最初の設問であっても問題文の最後まで読解しないと正解を導くことが難しいという点です。具体的には、設問 1 は問題文の最後から 3 行目にある「地域マスターを管理し、営業担当者の担当地域を登録する」という記述から正解を導きます。

特に難易度が標準的よりも高い設問がなく、問題のページ数が 6 ページと標準的であることを根拠に、問 3 の難易度を“標準的”と判断します。

■午後Ⅱ試験講評

午後Ⅱ試験の難易度については、問 1 は“標準的よりも高い”，問 2 は“標準的”です。午後Ⅱ試験全体の難易度としては“標準的よりもやや高い”と判断します。ただし、趣旨が詳細に書かれていて、趣旨に沿って論述しやすい点については例年どおりです。

新傾向問題は問 1 です。問 1 では、複数の情報システムからデータを収集して、業務目標達成のために必要な指標の提供する機能の設計について問われています。このうち、新傾向である点は、**複数の情報システムからデータを収集する事例について問われている点**、及び、**業務目標達成のために必要な指標の提供する機能の設計について問われている点**です。

次に各問題の講評を述べます。

問 1 複数の情報システムのデータを収集する必要がある指標の提供

複数の情報システムからのデータを収集して、業務目標達成のために必要な指標の提供する機能の設計について問う問題です。この問題において**特記すべき点は、論述する事例が限られてしまう点**です。具体的には、設問イにおいて、“業務目標達成のために必要な指標を提供する機能の設計”という具体的な内容について問われていること、なおかつ、指標は複数の情報システムから提供されなければならないこと、加えて、設問ウにおいて、データの内容の問題やその問題の対応について問われていることも、論述する事例が限られてしまう原因になっています。

次に**特記すべき点は、設問イとウで「どのような」と「どのように」を使い分けている点**です。論文設計の際には、この使い分けに沿って設計して、論述する必要があります。

新傾向問題であること、及び事例が限られてしまうことを根拠に、問 1 の難易度は“標準的よりも高い”と判断します。

問 2 現行システムと新システム間の差異を踏まえたデータ移行

情報システムの刷新や企業統合を背景とした、データ移行について問う問題です。この問題において**特記すべき点は、システム移行全般ではなく、システム移行のうちのデータ移行について問われている点**です。したがって、一括移行方式や段階的移行方式を新旧システムの並行稼働などを論点にしても趣旨に沿わないと評価される可能性がある点に留意して論文設計します。

次に**特記すべき点は、設問イとウにおいて、“踏まえた論述”が求められている点**です。具体的には、設問イでは現新システムの差異を踏まえた論述、設問ウでは移行計画を検討した観点を踏まえた論述です。「限られた時間内にデータ移行を確実に完了するために、データ移行における障害発生への対応時間の確保という観点を踏まえて」などと、踏まえることを明示した論述が求められると考えてください。

データ移行という記述式問題でも問われるトピックであることを根拠に、問 2 の難易度は“標準的”と判断します。

■次の試験に向けて

今年の午後Ⅱ試験の問 1 にあるような“業務目標を達成するために必要な指標を適切に設計する能力”を問う問題が、今年の午後Ⅰ試験でも問われています。具体的には、問 2 の設問 1 では“商談の見積額ごとの提案書提出率”という指標、問 3 の設問 4(1)では“成約率”という指標について問われています。したがって、午後Ⅰ・午後Ⅱ全般として、**業務目標の達成とそれにかかわる指標に留意して、試験対策の学習をする**とよいでしょう。

午前Ⅱ試験の対策では、今年は、68%の出題率で過去問題（SA 試験以外を含む）から出題されているので、出題分野などに留意しながら他の試験区分の過去問題を学習することも重要です。

午後Ⅰ試験の対策では、問題演習の際には、時間管理を徹底する必要があります。加えて、採点の際には正解例を基にした採点だけではなく、IPA の講評を確認して正答率の高い設問が不正解であった場合は、不正解の原因を分析して、正答率アップを目指すようにします。

午後Ⅱ試験の対策では、趣旨に「考えに基づいて」とあるので、あなたの“考え”などを示してから施策などを論述するように論文設計します。

－以上－